

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 月 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	河本悠吾

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県串間市幸島
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
生態学野外実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 4 月 24 日 ~ 平成 28 年 4 月 30 日 ( 7 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター幸島観察所、鈴木崇文氏
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>宮崎県の幸島には約 100 頭のニホンザルが生息している。古くからニホンザルの研究が行われている場所であり、餌付けによって、容易に野生のニホンザルを観察することができる。さらに、血縁関係や体重等のデータも蓄積されている。今回の実習は、野外での行動観察や、そこから得られたデータの解析についての基礎を学ぶことを目的として行われた。以下日程を示す。</p> <p>4/24 幸島観察所に到着、幸島についての講義 4/25 予備観察、テーマ決定 4/26 データ収集 4/27 雨のため幸島に行けず、都井岬で馬の観察 4/28 データ収集、分析、発表準備 4/29 発表 4/30 解散</p> <p>実習のテーマについてはぼんやりとは考えていたが、はっきりとしたことは決めていなかった。私は今までに、フィールドで調査をしたことがなかったので、どのようなことができるのかということも分からず、テーマを決めるのは難しかった。しかし、自分としてはフィールドでやるからには、行動観察などのラボではできないことを行いたいと考えてはいたので、予備調査のときに実際にサル行動を見てテーマを決定した。</p> <p>下見の際に私が気になったのは、サルたちの採食方法である。砂浜に播かれた麦を食べる際、サルたちの食べ方には大きく二つの行動が見受けられた。一つは手で麦を採取し、それを口に運んで食べる方法、二つ目は身体をかがめて直接口で食べる方法である。これらの方法をどのように使い分けているのか考えてみると、私には、麦が落ちている場所に水があるかどうかに関係しているように見えた。海や川の水が存在するところでは手を使い、乾いた砂地では口を使って食べているようであった。そこで私は、サル採食方法と水の有無の関係性を調べることにした。採食方法には、他の要因が関わっている可能性も考え、大人か子供か、麦の密度も調べた。</p> <p>方法としては、麦が播かれている場所の中からランダムに一カ所選ぶ。そこに 30cm 四方の枠を描き、その中の麦の密度を計算した。そしてその枠から一番近くにいる個体の採食方法と、大人か子供かを記録した。このとき、枠の中の麦密度と、サルがいた場所の麦密度は同じであると仮定した。これを一時間程度繰り返して、様々な場所でのデータを得た。統計解析には <math>\chi</math> 二乗検定を用いた。</p> <p>解析の結果、採食方法と水の有無には関係が見られなかった。しかしながら、麦の密度が採食方法に影響を与えていることが分かり、麦の密度が小さくなるほど、手を用いて採食するという結果を得た。これらの結果について考えてみると、水と採食方法の関係に関しては、実験の条件にいくつか問題があったことが結果に関係していると思われる。</p>

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

まず、水のある場所について、本来は川の流れのある中や、海での測定を行いたかったが、麦が流れることから密度の測定ができず、川の脇の薄く水が張っているところでしか測定できなかった。調査二日目には、その部分の水が減っており、水の有無を判断するには微妙な場所になってしまった。また、麦の密度が減ることによって、徐々に砂地でも手を使い始めるので、それも影響していると考えられる。時間とともに麦の密度は減るので、時間を限定して、さらに調査日数を増やすなどできればまた違った結果が得られるかもしれない。

麦の密度と採食方法については、採食効率などが結果に関係していると思われる。口を地面に近づけて食べると視野が狭くなる。麦の密度が大きいときにはそれでも多くの麦を視界にとらえられるために問題ない。しかし、密度が小さくなると、それでは麦の位置が把握できず、探すのに時間がかかる。よって体を起こして多くの麦が視界に入るようにし、効率よく採食しているのではないかと考えられる。

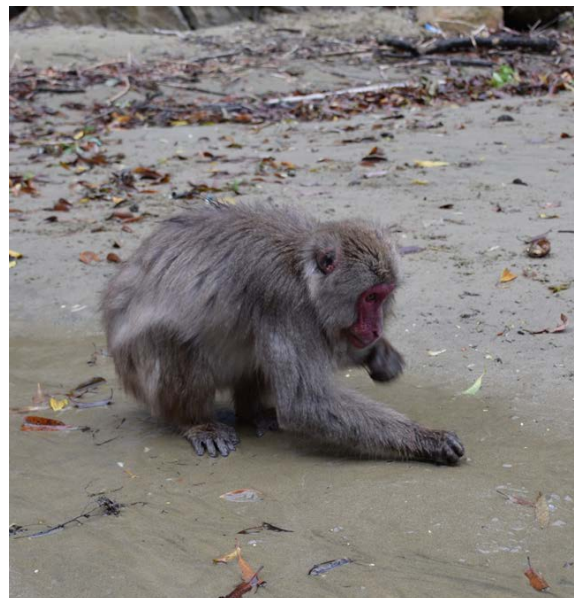
今回の実習を通して、行動観察とデータ解析の基礎を学ぶことができた。どちらも今後研究を進めていくうえで重要なものであるので、早い段階で触れておくことができよかったと思う。観察法や解析法は様々あり、今回用いた方法はその一部でしかないので、実際の研究内容に合わせて、他の方法についても学んでおく必要があるだろう。



幸島の砂浜



口で採食



手で採食

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書  
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



海でエサ探し



川でエサ探し



都井岬の馬



都井岬の馬



集合写真

6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS の支援により行われました。また、本実習に際し、辻大和先生、田中洋之先生、鈴木崇文さんにご指導・ご協力いただきました。感謝申し上げます。